

愛玩動物看護師が実施した人と猫の多頭飼育問題支援におけるガイドラインの活用事例
千葉科学大学動物危機管理教育研究センター¹⁾ わんにゃんぴっ相談室²⁾
西村 裕子¹⁾ ²⁾ 増子元美²⁾ 谷茂岡良佳²⁾

I. はじめに

WHO（世界保健機関）によると、日本における不安障害の推定患者数は、約 1,000 万人以上と言われ、社交不安障害、パニック障害などの症状が含まれる。今回不安障害と診断され、人間不信を抱えていた A 氏 40 代と、その傍らに暮らす 27 頭の猫の支援について、環境省の「人、動物、地域に向き合う多頭飼育対策ガイドライン」(以下:ガイドラインとする)に基づき支援した事例を課題検討したので報告する。発表に際し、A 氏の個人情報保護と発表目的等について、口頭と書面で説明し同意を得ている。

II. 背景

A 氏は、経済的困窮と不安障害による社会的孤立を抱え、社会福祉的な支援も必要としており、猫の飼育維持が困難な状況で、すべての猫の譲渡を希望。猫の飼育環境は、飼い主の同居がなく、1 日 1 回夜間に訪れ飼養管理していた。ケージ飼育に賛同が得られず 6 畳二間の室内に放し飼いの状態。一部の猫は警戒心が強く、たらいでの食事と飲水の共有、部屋中にトイレが置かれていた。軟便と嘔吐が点在し、どの猫が体調不良なのか不明だった。猫の中には膿状の眼脂や流延、鼻水もみられた。

III. 活動の実際

ガイドラインを基にチームで支援することを決め、記録票を使い飼い主と猫の状況把握を図り、自立支援制度等の人の精神福祉についても説明。その上で 1 頭でも多い譲渡を目標とし支援を開始した。キーボックスでの置き鍵を提案し、動物看護師 1 名が、適宜猫の管理に入り、交換日記による報告を実施。他にも獣医師への往診依頼や、里親探し用チラシ作り、寄付金や物資集め、譲渡会への参加支援等も行った。3 か月後、譲渡できた猫は 4 頭。動物看護師から疲弊の訴えがあり、再度 A 氏とともに支援計画と目標の修正を行った。すべての猫をケージ飼育に切り替え、健康把握と管理し人慣れ訓練を実施。A 氏と話しつつボランティアの数を増やし、動物看護師は現場支援ではなくアドバイザーの位置づけとした。

IV. 考察および結語

ガイドラインは、チーム内での多頭飼育問題支援に対する意思決定を行う根拠となった。またガイドライン内には、評価項目や評価段階、達成目標を細かく設定することが重要とある。支援の際、飼い主のニーズを組み込んだ計画を打ち出し、飼い主と猫に合わせた目標設定を行ったが、支援が長期化する場合には、飼い主や猫だけでなく支援側の負担感を軽くして、有効感を高める計画と目標の設定も必要であることが示唆された。